

北越の三沙門 — 大忍・有願と良寛 —

Three Priests in Hoketsu — Dainin, Ugan, and Ryokan

蔭 木 英 雄

仏教文学を凡俗者が研究していて、自誠しなければならぬ第一は、自己の小智凡情を脚下照顧せずして、深遠偉大なる作者（その殆んどは仏教者）の境涯を自己の狭鏡で映して、矮小化卑俗化して解釈してしまう事である。三千大千世界（みちのおお大宇宙）の攝理の中の、「花紅柳緑 眼横鼻直」のあるがままの現実即真如の心境表現を、相対的分別世界の客観的学問的方法論に執らわれて、作品をずたずたに分析し、揣摩憶測の論陣を展開して、作品全体の生命を殺してしまう事である。

第二は、文字言語の上から宗教的。世界に溺れ、仏教の真実を把握することなく仏教的情緒に流されて靈性的自覚、哲学的照顧を失なう事である。そして作者を景仰敬慕するあまりに、作品を実体以上に美化し崇高化してしまうのである。

自誠すべき第三は第一に通じるかも知れぬが、仏教文学をば所

謂「抹香臭い、坊主臭い」（蔬筍氣）というだけの理由で、作品の文学的価値を軽視してはならない事である。

宋の詩論集『詩人玉屑』卷二十にある「無蔬筍氣」の詩觀の影響を受けて、北山（金闍寺）時代の義堂周信でさえ、

其送樹中心一篇、詞麗而不蔬筍焉、理深而不膚淺焉。（演宗

講主詩序）

と述べて、蔬筍の氣（仏教臭）の無い樹中心の作品を稱賛した。⁽³⁾

詩偈の文学的価値は仏教臭の有無に拘らず、感覺美、表現美、韻律美、凝縮美（豊かな連想可能）、思想性にあるのである。

結局、仏教文学を読むという事は右の価値基準に照し合せつつ、自己の五蘊を照見することであり、禪詩を解説し論じすることは（極論の嫌いはあるが）布施行にはかならない。

寛政八年（一七九六）越後に帰郷した北越沙門大愚良寛は、曹洞禅を修行した身でありながら、曹洞寺院には殆んど近寄りなかつた。彼の詩集『草堂集』を繙くと、「南泉」「靈照女」「洞山和尚偈」「読永平録」などの曹洞の禅詩を多作しているのに、帰郷してからは越後の国上寺、香積山徳昌寺、照明寺密蔵院、西生寺、宝塔院、本覚院など多くの真言宗寺院^⑤に出入し、専念寺、永了寺、大蓮寺、浄玄寺、隆泉寺などの浄土真宗の寺々と深く係わつたのである。そして在郷の阿部定珍、鈴木桐軒、三輪権平、解良叔問や、亀田鵬斎、大村光枝らの江戸から来遊した学者たちが在俗の人々と親交を結び、大忍魯仙や有願上人の如き曹洞禅僧との交わりは、極めて例外的なものであつた。小論ではこの越後の三沙門の作品を精読して、彼等の雅交を見究めたいのである。

三沙門のうち最も年少の大忍魯仙は、良寛が生れた出雲崎の西隣の尼瀬出身である。彼の略年譜を『無礙集』^⑧などから辿つてみよう。

天明元年 一七八一 1オ 尼瀬町に生まる。幼名は小黒佐久太。
 七年 一七八七 7 尼瀬の曹洞宗双善寺に入る。
 (不明) ? 宇治の興聖寺で玄楼奥龍及び靈潭魯龍に参す。

享和三年 一八〇三 23 七月、宇治を発ち永平寺に拝登した後、帰郷する。

文化元年 一八〇四 24 夏、頸城郡松之山温泉で病を養う。
 二年 一八〇五 25 七月、『無礙集』を京都松月堂より上梓。

(不明) ? 武蔵矢島村（深谷市矢島）慶福寺住持とな
 る。
 文化八年 一八一— 31 三月九日、尼瀬の双善寺で示寂。
 蒲柳の質だつたのだろうか、彼は三十一歳の若さで此の世を去つた。

大忍魯仙が二十三歳年長の大愚良寛と出会つたのは何時だつたのだろう。小黒佐久太が双善寺に入った時、良寛は既に遠く備中玉島（倉敷市）の円通寺で、大忍国仙の膝下で只管打坐に励んでいた。しかし、同じ尼瀬町内の曹洞宗光照寺で剃髪した良寛の名は、受業師の双善寺住職興崑春隆或いは光照寺住職玄承破了あたりから聞いていたであろう。

小黒佐久太が大忍魯仙と名乗るようになった時期は定かでないが、その系字の魯から推測すると興聖寺の靈潭魯龍に参じた頃と思われる。自分の僧名と酷似する大忍国仙の法嗣で、郷里の先輩良寛には並々ならぬ関心を抱いていたものと想像される。

『無礙集』に次のような五言十六句がある。

(作品番号に□を付したのは大忍魯仙、○印は良寛、()は有願の作品である。)

① 懐良寛道人

良寛老禅師 如愚又如癡
 身心総脱落 何物又可疑
 不住名利境 不遊是非岐

朝向何処往 夕向何処帰
 任地世人誉 任地世人欺
 師曾到吾廬 告吾微妙辞
 吾又久抱病 因師既得医
 其恩実無限 何以又報之

○如癡Ⅱ『碧巖録』(以下『碧』と略記)二十五則に、「見ずや、南泉道わく「学道の人、癡鈍の如くなる者也た得難し」とあり、良寛の『法華讀』方便品に「安祥定より出れば宛も癡の如し。」さらに「与由之飲酒楽甚」に「且つ太平の世を喜び 日々酔いて癡の如し。」と詠う。 ○何処Ⅱ『碧』二十五則に「盧老は知らず、何処にか去る。四十五則に「僧趙州に問う「万法一に帰す。一何処にか帰す」とある。良寛は(無題が多い)「我が生何処より来り 去りて何処にか之く」と詠ずる。 ○微妙Ⅱ『永平広録』(以下『永』と略記)卷一に「如来微妙の音を伝え聞く」とあり、良寛の『法華転』方便品に「溪声は惜しまず微妙の音の句がある。 ○得医Ⅱ良寛は、「我白幽伝を読み 聊か養生の趣を得たり」と詠じる。『夜船閑話』の養生法を良寛は大忍に教えたか? ○恩Ⅱ良寛に「知らず何を以て仏恩に答えん 一炉の香煙一の坐禅」という句がある。

大愚良寛老師は (大愚の道号にふさわしく) 愚鈍のようで又痴人のようだ 身も心も一切の束縛から解脱し 何ものも疑うこととの出来ない(真実底の人だ) 名誉や利益に執らわれず 是非善悪の相対的世界にうろろうろしない 朝は何処に向って往き夕暮には何処に帰着するのだろうか(ありのままの自然法爾の世界に生きていらっしやる) 世間の人が褒めそやすのに無頓着で

俗人が欺くのにかまかせている 良寛老師は以前私の小庵においてになり 私に微妙の法門をお説きになった 私は又長らく病氣持ちだったか 老師によって治すことが出来た そのご恩は全く無限で どうしてお報い申したらよいだろう。

この作品から考えると、二人が実際に出会ったのは、魯仙が北越に帰郷した享保三年の秋以降ではなかったか。良寛は、

- ・ 心に流俗を逐うこと無く 人の癡獸と呼ぶに信す
 - ・ 生涯何の似る所ぞ 縁に従い且らく癡を養う
 - ・ 癡頑何れの日か休まん 孤貧是れ生涯
 - ・ 兒童相い見て共に語る 去年の癡僧今又来ると
 - ・ 利を論じて毫末を争い 道を語るは徹骨の癡なり
- と繰り返し癡人を以て自任しているが、文字通り短絡的に「おろか者」と解する読者はいないだろう。大忍魯仙は良寛の真実相、真面目を短時日の交際のうちに感得したのだった。魯仙は自らの内なるものを、良寛の中に見出したのではなかったか。二人は俗に言う「波長が合った」「機縁が契った」のであろう。次の魯仙の作品がそれを証する。

② 癸亥秋将辞仏徳山、呈山主玄楼和尚

屈指春秋二十三 唯增愚鈍自堪慚
 仏門妙法無纒証 祖室玄談不少諳
 修行功勲皆悉棄 睡眠懶惰独相耽
 沉貪飲食頗蒙債 巨免臨行一棒担

○癸亥¹¹享和三年　○仏徳山¹²宇治の仏徳山興聖寺。道元が創建した伽藍は今無く、伏見区深草宝塔寺山町の日蓮宗宝塔寺がその遺跡だという。慶安二年（一六四九）淀城主の永井尚政が宇治市宇治山田に現在の興聖寺を復興し、江戸時代の宗統復古運動の拠点となった。○玄楼和尚¹³玄楼奥龍（一七二〇）一八一三。狼とあだ名を付けられたほど厳しい禅匠。○妙法¹⁴良寛の『法華転』普賢菩薩勸発品に「今妙法に遇い聞知に飽く」の句がある。○玄談¹⁵『永』巻一に「格を出て玄談すれば烏龜は火に向かう」とある。○諳¹⁶『碧』八則の「長慶相い諳んず、眉毛生也」に拠る。○修行¹⁷『正法眼蔵』（以下『正』と略記）授記に「世の常に思ふには、修行功満して作仏決定するとき、授記すべしと学しきたると雖も、仏道はしかにはあらず」とあり、良寛に「蓋し修行の力に縁れど、争でか無作に達するに如かん」の句があり、二人とも必ずしも修行を絶対視していないことに注目。○睡眠¹⁸『永』巻十の「自賛」に「居常懶くして牛頭に似（中略）飯了了って睡快を図る」とあり、良寛にも「雨を聴き終日眠る」の句があつて、単なる睡眠ではなく、自在境のねむりである。○懶惰¹⁹前述の「自賛」に「居常懶くして牛頭に似」や良寛の「山翁暫らく余が疎懶を諳んず」と、問うに懶し、迷悟の岐の句を読むと、単なる怠け者の意味ではない。○貪飲食²⁰前述の道元の「自賛」に「飯了了って睡快を図る」とあり、良寛は「飯に飽き病を放つ何ぞ快活なる」飽食何の作す処ぞ騰々太平に老ゆ」と吟じていて、自由の境涯を表わす。

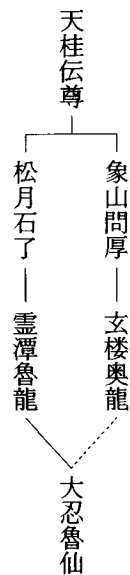
享保三年の秋、興聖寺に別れを告げた時、住持の玄楼和尚に奉呈したうた

指折り数えてみると二十三年間　たゞ愚鈍を増したただけで慚愧に

堪えません　仏門の妙法はちつとも悟ることなく　祖師の部屋での奥深い禅談は少しも憶えておりません　修行の成果はすべて捨てさり　私独りひたすら眠って怠けるばかりです（自在の境地です）　まして飲食を貪って債を重ね　いまお別れして旅立つに際し和尚の一棒の打を免れることは出来ません

表面的字句では、修行の成果を上げずに別れることを慚愧しているのだが、語注に示した詩語の用例を熟視すると、良寛の禅境に相い通ずる魯仙の並々ならぬ境涯が窺われる。

当時、「狼玄楼、虎光通」と、有馬光明寺の大円光通と共に、厳しい禅匠として天下に鳴り響く玄楼奥龍に大忍魯仙は参禅し、そのあと霊潭魯龍について法を嗣いだのである。法系を示すと、



である（点線は受業関係）。玄楼・霊潭両禅師の家風がどういふものか知るよしもないが、¹¹²によって大愚良寛と大忍魯仙の道人像がダブルのである。

これまで、越後に帰郷してからの良寛は、禅僧として民衆の教化に努めなかったとよく言われる。しかし魯仙に対しては¹¹で、

師（良寛）曾て吾が廬に到り
吾に微妙の辞を告ぐ

と詠じているように、良寛はわざわざ魯仙の廬、それは双善寺内の一室と思われるが、そこを訪ねて、思議分別を超えた深い仏法を説いた。もしかすると①の「微妙」や②の「妙法」の語注の『法華転』の用語例や、「甚深微妙法、難見難可了（中略）無漏不思議、甚深微妙法、我今已具得」（『法華経』方便品）から推察すると、『法華経』の真髓を魯仙に説いたのではなからうか。周知の如く良寛は『正法眼蔵』法華転法華の教えを継承し消化し発展させ、「法華讚」「法華転」を作っているのである。

③ 有懐

大忍俊利人 屢話僧舎中

自一別京洛 消息杳不通

○俊利Ⅱ『碧』六十八に「仰山極めて其（三聖慧然）の俊利なるを愛して之を明窓下に待す」とある。 ○京洛Ⅱ良寛の「伊勢

（別本では信州）道中」に「我京洛を発してより」とあるが③の一別はこの時ではあるまい。 ○消息Ⅱ『永』巻一に「也大有

也大有、消息一たび通すれば古も今に似たり（大悟は無量であるという事情がつかめると昔も今も同じである）」とあり、良寛『法華讚』提婆達多品に「曾て阿難を以て消息を伝う」の句があるの

で、後述の口語訳ではカッコ内に解すべきである。 大忍魯仙は俊敏の人で、しばしば僧舎の中で話し合った（僧舎の内部事情を話してくれた）一たび京洛へ出発して別れてから（京洛で別れてから）彼の消息は不明である（真の仏法は越後に流

通しなくなった）

承句と転句とは右のカッコ内のように解釈した方がよいかも知れぬ。しかし筆者が一番問題にしたいのは、良寛が魯仙を三聖慧然（臨済義玄の法嗣で『臨済録』の編者）に重ね合せて（語注参照）、

大忍は俊利の人

と詠っていることである。これは②の、

唯だ愚鈍を増して自ら慚ずるに堪ゆ

と喰い違ふ。へ先輩良寛は俊利と褒め、魯仙は愚鈍と謙遜している、その違いである」という説明だけでは納得出来ない。③の起句は筆者の長年の疑問であった。

④ 遊方

北越愚僧字大忍

追雲隨水不暫駐

或宿廢舎破宅裏

唯愧道業終不就

飛錫曾辭出雲崎

廳々騰々任所之

或宿廢村寒郷陞

年々空増鈍与癡（後略）

北越の愚僧の字は大忍で、むかし錫杖をつけて故郷出雲崎を出た。行雲流水の生活は暫くでも一所不在であり、さまよいゆつたりして自然法爾にまかす。ある時は壊れた空家に泊りある時は荒れた寒村に一夜の宿を求めた。ただ恥かしいのは仏道修業が成就せず、年々空しく愚鈍さを増すばかり（後略）

第一句の大忍を大愚と書き変えて、「④は良寛の作品である」と提示しても、疑ったり否定したりする読者は殆んどいないであら

う。それほど④は良寛の詩風そっくりで、波状傍線の句は良寛詩のキーワードと言って過言ではない。良寛は、

・生涯身を立つるに懶く 騰々天運に任す

・一柄と一鉢と 騰々此の身を送る

というように、騰々任運を繰りかえし繰り返し詠っている。そして後注⑩の拙論でも記したが、

・終日任運騰々として、癡人の如く、相い似よ。〔宛陵録〕

・一切騰々として痴人の如く、似よ。〔二入四行論〕

とあるように、達磨も黄檗希運も真の仏者の生き方として、「痴人の如く」と共に「騰々」という形容詞を用いているのである。

だいたい漢語に於いては、騰々のような疊語は日本語のこ／＼すや／＼と同じく擬態語や擬声語であり、聞き手や読者の念頭にリアルな生き様を描かせる語である。

大忍魯仙は二十代半ばにして、騰々たる真の仏者の風格を備えていたのであろうか。一步譲って、魯仙は「騰々として之く所に任す」の境涯を目ざしていたのであろう。

⑤ 自贈

由来柔弱質 況又抱沈痾

何処寄踪跡 寥々山中家

籬辺皆荆棘 戸外只藤蘿

去秋且今春 皎月又芳花

時聞牧童謠 或聞樵者歌

飢則喫淡飯

渴則啜粗茶

伸脚臥又臥

生涯等閑過

○踪跡∥足あと、行方。『永』十に「靈光一点無蹤跡、(和李通判韻)」、一廻照顧跡蹤無(酬首座來韻)」があり、良寛詩に「自從出家後 蹤跡寄雲烟」の句がある。○寥々∥語義はさびしく空しいさまたが、下記の用例からは、ある禅境を形容する。『永』

卷四に「寥々九夏超諸相」とあり、良寛詩に「寥々掩柴扉」とか「寂々倚蒲団 寥々对虚窓」の対句がある。○荆棘∥いばら。

『法華讚』法師品に「荆棘室疾黎座」とある。○淡飯粗茶∥お粥と粗末な茶。『正』家常に「家常の粗茶淡飯は仏祖意句なり。」とあり、良寛詩に「国上山下是僧家 粗茶淡飯供此身」の句がある。

○伸脚臥∥足をのばして眠る。『碧』七十八則に「了事衲僧消一箇 長連床上展脚臥」とあり、『正』安居に「しかあれば遮の巴鼻子を得了って未だ喫飯伸脚して睡らざるに、這裏に在ること三十年なり。」の文がある。○等閑∥語義はなおよざり

という意味だが禅林では平凡無為の心境を示すことがある。『永』卷十に「此段風流亦等閑」の句があり、良寛の『法華転』法師品に「等閑掛著忍辱衣」の句があるほか、道元、良寛に用例が多い。

私はもともと体が弱く、まして持病をもっている。何処にこの身を寄せようか、いま寂しい山中の庵に住んでいる。垣根はい

ばらだらけ、戸外には藤づるだけが生えている。去年の秋や今年の春は、明月を眺め美しい花を賞めた。時には牛飼いの少年の歌を聞き、時には木こりの歌声が聞える。腹がへるとお粥をたべ、のどが渇くと粗茶をすする。足を伸ばして寝そべり、生涯平凡無為に過ごす。

涯平凡無為に過す

傍線の語句の拙注によって、⑤も良寛の詩境と共通する禅詩であることが明らかである。特に最後の二句は、良寛の、

⑥ 生涯懶立身 騰々任天真

囊中三升米 炉辺一束薪

誰問迷悟跡 何知名利塵

夜雨草庵裡 双脚等閒伸

良寛は（自我を立てて）榮達する事などうとましく あるがま

ま自然法爾に日々を過すのじや 袋の中には三升の米があり

炉端には薪が一束ある（何の不足もない） 迷いや悟りなど相

対的世界など問題にせず 名誉利益など関心が無いわい

雨の夜に小庵の中で 両足をゆったりと伸ばしている

の境地を思わせる。

このように二人の禅僧の詩境を味わって来ると、②の愚鈍と③

の俊利との喰い違いが氷解する。魯仙は良寛から「微妙の辞」の

仏法を受けて「騰々愚痴」の禅を体得し、「等閑に脚を伸ばす」

生活を送ったのである。それは良寛から見ると、

うんよくぞ体得したぞ。魯仙はなかなか俊利な若者じや。

と感服して③を作ったのである。ゆえに良寛は自分が病気になる

⑦ 病中

苦吟実如清秋虫 詩成自怪格調漫

世上今無大忍子 誰人為予防客難

○詩「道元は『永』巻七で『夫れ出家人は詩書唱歌等を業とせず、頭燃を救つて学道すべし』と述べ、良寛はこれを受けて『孰か我が詩を詩と謂う 我が詩は是れ詩に非ず 我が詩の詩に非ざるを知つて 始めて与に詩を言うべし』と吟じた。○客難「後述の「読良寛道人偈」参照。

まるで清秋の虫のように苦吟して 詩が出来てみると格調が散漫なのが我ながらおかしい 今はこの世に大忍魯仙がいなくなりわしを非難する論客を誰が防ぎ弁護してくれようぞ

と亡き魯仙を偈ぶのであった。二十三歳も年令が離れ、しかも相見見る期間は長くなかったが、良寛と魯仙とはまさに忘年の道友だったのである。

語注に示した如く、良寛の詩（の格調）の詩に非ざるを知つて、詩を与に言うべき者は魯仙をおいて無かった。大忍魯仙の「読良寛道人偈」（原漢文）の一部を書き下しておこう。

⑧ 会客有りて之（良寛道人偈）を難じて曰く、「良寛道人の偈は規格に依らず、体裁を守らず、只だ是れ荒唐の辞なるのみ、然るに師（魯仙）之を尊崇し、以て至道中の妙曲と為す。則ち大錯ならずや」と。

曰く、「余の錯と否とは姑く致さん。汝、道人の偈を視ると雖も、未だ夢にも其の旨を知らざる者なり。苟くも其の旨を知らんと欲せば、須らく先ず至道に達すべし。未だ至道に達せずんば則ち至道中の妙曲有りと雖も、奚んぞ得て知るべけんや」と。

至道とは言う迄もなく甚深微妙の法、良寛にあっては『騰々愚痴』の世界である。良寛や魯仙の詩はまことに詩禪一致の表出であった。

大忍魯仙は東岫有願とも忘年の交を結んだ。

⑨ 贈東岫老人

老翁既是倦拈槌 格外風流興不涯

六十州中総睥睨 三千界裏誰追隨

雜談顛語皆堪案 仏眼魔眸那得窺

可笑吾今初值遇 等閑開口吐言辭

○拈槌|| 砧を鳴らす為に槌を持つ。修行僧を接化すること。

○格外|| けたはずれ。『正』弁道話に「一向に坐禪するとき(中略) すみやかに格外に逍遙し大菩提を受用するなり」とある。

○三千界|| 三千大千世界。須弥山を中軸とした宇宙。『法華讀』薬草喩品に「法雨等澍三千界」の句がある。○顛語|| 仏法とは程遠い顛倒の言語。しかし時として真実の言葉を逆説的にいう。

『碧』二十一則に「諸方皆之を顛倒の語と謂う、那裏か此の如くならん」とあり、良寛詩に「苦思有願子 平生如狂顛」の句がある。

○仏眼|| 五眼の一で諸法実相を照見する大智慧眼。『正』道得に「この兀坐不道は仏眼也靦不見なり」とある。○等閑|| ⑤参照。なお『碧』十一則の「等閑の一句一言群を驚かし衆を動かす」が参考となる。

有願和尚はもう学人の接得に倦み疲れて(還俗し?) 規格はずれの風流は興趣がはてしない 六十余州日本全国をにらみつけ

三千大千世界には老師に追隨する者は誰もいない 雑談や仏法に縁

遠い話(逆説的表現?)は充分楽しく 仏や天魔の眼でも老人の心を窺い知ることが出来ぬ お笑い草なのは私が今をはじめて老翁にお会いして のんびりおしゃべりしている事だ。

この有願老居士が良寛禪師と親交を結んでいた事は有名であり、北越の三沙門は互いに深く心を許し合っていたのであった。そして三沙門の接点は⑨の第二句の『格外風流』や終句の『等閑』であった。

ところが有願の経歴は明らかでない。白根市新飯田の円通庵(田面庵)庭にある、原田勘平撰併書の碑陰文には、

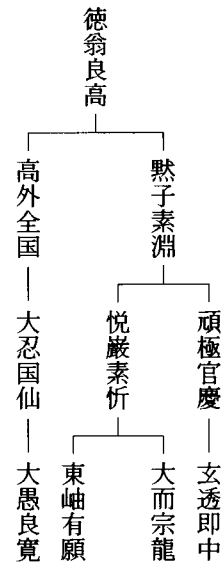
有願和尚ハ代官島ノ里正田沢氏ノ出デ元文三年ニ生レタ。少時茨曾根永安寺ノ大舟和尚ニ投ジテ出家シタ。(中略)文化五年八月ニ歿シタ。行年七十三。(後略)

とあり、生没年と行年とが計算に合わない。ともあれ良寛より二十二三歳年長、つまり父の山本以南とほぼ同年ということになる。

良寛の師の大森子陽も有願と同じく古岸大舟に参じた事、有願の門弟越秀が玉島円通寺の大忍国仙について一年間修行した事等の言い伝えを信じると、良寛は越後に帰郷する以前から、有願を知っていたことになる。前記碑陰文の(中略)の部分には、

性来常人ト異ッタノデ人多ク之ヲ愚トシタト云ウ。後燕町ノ万能寺ノ住職トナリ、或ハ加賀天徳院ノ悦嵩ニ参ジタガ、多クハ消息不明デアッタ。晩年越後ニ帰り新飯田ノ田面庵ニ隠居シ(後略)

とあり、やはり痴愚の人であった。彼は悦巖素忻に参禅したが、法を嗣いだかどうかは不明である。なお大忍国仙も悦巖和尚に参禅しており、法系は、



である。良寛が大而宗龍の教えを受けたことは、宮榮二氏の研究⁽¹⁴⁾で明らかであるが、良寛が直接有願と交り結ぶようになったのは、やはり彼が越後に帰ってからの事であろう。

⑩ 余持鉢到新潟、逢有願老人説法白衣舎 因有偈二首

似欲割狗肉 当陽掛羊頭

借問逐臭者 優々卒未休

○白衣舎||俗人の家。『永』巻十に『半年喫飯白衣舎』の句がある。○羊頭||『碧』七十七則に『茅坑裏の虫子、市肆買売羊頭案頭に至って還た超仏越祖底の道理有りや』とある。

余は鉢の子を持って新潟に来ると、有願老人が俗人の家で説法しているのに出逢った。そこで二首の偈を作った。

犬の肉を料理するように民衆を教化しようとして まっ昼まに羊の頭を店頭に掲げる如く(解り易く方便を用いている) ちよっとお尋ねするが臭肉を求めている者(名利を求めている邪僧)は

ゆったりとして(伽藍仏教をお座なりに説いて) 俄かに説法をやめないのは何故だろう

対機説法ではなく、真正面から仏法を説いている有願を揶揄している偈のようだが、実は有願を尊敬しているのである。もう一首 同題の偈、

⑪ 伊奈疎慵者 乞食此地游

逢著鬧市裡 一笑共悠々

○疎慵||ものぐさ。ここは無為自然のさま。『碧』二十四則に『風穴云く、老倒疎慵無事の日、閑眠高臥青山に對す』とあり、良寛も『還來疎疎慵 坐臥任屈伸』と詠う。○逢著||思いがけなく出会う。禅では真実に出会うのによく用いる。『碧』三十四則に『馬祖云く路上還た一人に逢著するや』とあり、良寛の『読永平録』に『到处逢著正法眼』の句がある。○鬧市裡||賑やかな街の中。『碧』十一則に『有る時は孤峰頂に独立し、有る時は鬧市裏に身を横たう』とあり、良寛の『法華讚』提婆達多品に『暫時相逢鬧市裡』の句がある。

このわしは無為の人間で 乞食托鉢して此の新潟にやって来た賑やかな街の中で有願老と出会い 一笑して二人いっしょにゆったりしている

現在の有願自筆の書画の多くは、『有願居士』と居士名で署名しており、⁽¹⁵⁾⑨⑩は『老人』とあつて決して禅師とか和尚とか記していない。良寛や魯仙が交わった頃の有願は、還俗していたのではなかったか。

(12) 寿年九十歳有願居士像自画賛

不念仏法 盃具覓錢

為奕美酒 踞当爐前

○美酒Ⅱ『碧』六十七則に『美酒一盞、却つて(宝) 誌公に水を以て操過せらるるが如し』とあり、秀れた説法講經を譬える。

九十歳のめでたい年、自分で描いた有願居士像につけた賛納は仏法を念わず 盃を持って酒代を求め、うま酒の盃を重ねようと思つて 熱燗をする囲炉裡の前にうずくまった

有願は七十一歳で死んだのだから、寿年九十歳は戲筆であろう。第三句の美酒を語注のように解すると、⑩と同じく説法をする有願老人の姿が浮び上ってくる。

法眼玉元居士、於画為吾師也。居士亦問禪於吾也。居士之画法略加禅力。(中略)

天明八龍舎戊申仲春仲浣日 日国有願士撰

これは狩野玉元画「十牛図」の序文の一部であり、有願老居士が画師の狩野玉元に禅を説いていることがよく分る。説法に積極的でなかった？良寛と対蹠的である。禅風や性格が相い反する二人が、よく波長が合っているのが興味深い。

⑬ 看花到田面庵

桃花如霞夾岸発 春江如藍接天流

行看桃花随流去 故人家在水東頭

○桃花Ⅱ『永』巻四に『能く永平の道を疑著せずんば、何ぞ必ずしも靈雲桃花を見ん』とある。○随流Ⅱ『正』行持に『この僧また問ふ「出山の路は什麼の処に向つてか去る」師曰く「流に

随ひ去る』とあり、良寛は『歩みて流水に随ひ溪源を覓む』と吟じる。

桃の花が兩岸に霞のように咲き 春の川は藍の如く天空に接するまで流れている 歩きながら桃花を眺めて流に沿って行くと旧友の有願居士の小庵は川の東にあつた

桃の花といえはすぐ陶淵明の「桃花源記」や、李白「山中答人」の『桃花流水杳然去 别有天地非人間』の名句、そして何よりも靈雲志勤の開悟の契機を想起する。有願居士はそういう別天地の人であつた。

⑭ 春暮

芳草萋々春将暮 桃花乱点水悠悠

我亦從來忘機者 恼乱風光殊未休

○萋々Ⅱ草木が盛に茂る擬態語。李洞「繡嶺宮」春草萋々春水緑の佳句は後世愛用された。○忘機Ⅱ無我無心になること。『従容録』巻十二に『忘機婦去同魚鳥』とある。○恼乱Ⅱ悩まし心を乱す意だが、禅語には『永』巻三の『瞿曇老賊入魔魅 恼乱人天狼藉時』など逆説的用例が多く、良寛も『法華讚』譬喩品で『恼乱春風卒未休』と詠じている。○風光Ⅱ風と光。しかし単なる風景ではなく『正』諸法実相に『それよりこのかた、日本寛元年癸卯に到るに始終十八年、すみやかに風光の中にすぎぬ』とあり、良寛は『総為風光誤此身』と吟じている。

芳わしい草が繁つて春の一日は暮れ始め 桃花があちこちに咲き川は悠々と流れている 私と同じく從來無心無我の者で 人の心を悩ます(しかし、それがそのまま真実へ導く) 風と光はいつ迄

もやまない

長谷川洋三氏はこの⑭を精読して、後半の二句を、

私も従来機心を忘れた者であるから、この春景色に強く心曳かれてとどまることがない。

と訳しておられるが、筆者は『惱乱・風光』の語注の用例を踏まえて、右のようにカッコをつけて解釈した。良寛はそういう風光の中、有願居士を訪ねたのである。

⑮ 訪有願居士

草堂寂閉扉 正是揺落天

鳥雀喧檐頭 返照滿荒村

念子涉山河 杖策言往還

回首為千古 流水去潺湲

○閉扉||良寛の『從參曹溪道 千峰深閉門』や『無心長閉門』の句を読むと彼の禅心を象徴している語である。○千古||大むかし。しかし良寛は『共是為千古』とか『使人千古仰此翁』(芭蕉翁)と詠じて、今も存続している事を表わす。○流水||『永』卷十の『自贊』に『実相元來此裏真 留而難知流、水底』とあり、良寛に『歩随流水、水覓溪源』の句があり、傍点に留意すべきである。

草堂は静寂で扉をとざし まさに木の葉の落ちる秋である 小鳥が軒端でさえずり 夕日が貧しい村を照らしている 有願居士よ、あなたを思つて山河を越え 杖をついて往き来したふり返るとそれは大昔のこと 小川がさらさら流れている

有願居士生存時のような詩題だが、第七句の『回首為千古』はそれを否定する。しかし、良寛の有願敬慕の心はずっと存続していたのだった。

⑯ 再到田面庵

去年三月江上路 行看桃花到君家

今日再来君不見 桃花依旧正如霞

○再来||良寛の詩に『人間有虧盈 再来定何年』の句がある。去年の三月、川べりの道を 桃花を見ながら歩いて君の家に行つた 今日もう一度来てみると君の姿は無く 桃花は(去年より)ずっと昔と同じく霞のように咲いている

劉廷芝『代悲白頭翁』の『年々歳々花相似 歳々年々人不同』の佳聯は古今に通ずる人間の悲哀である。良寛は、

この里の桃の盛りに来て見れば 流れにうつる花のくれなるとも歌っている。しかし禅者は単なる悲哀に流されてはいない。

⑰ 有懐

苦思有願子 平生如狂顛

自一逐逝波 于今六七年

○狂顛||気がい。しかし良寛の『法華讚』如来寿命品の『乃昼乃夜謾狂顛』も単なる気狂いではない。『永』卷五の『即心即仏是風顛』や『永』卷七の『黄檗云、這風顛漢參堂去』が参考になる。○逝波||逝水に同じ。『論語』の『子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜』に依る。

しきりに思うのは有願さまの事 平生は(即心即仏の)気狂いの

ようだった　一たびあの世に逝ってから　もう六七年もたつて
しまった

良寛は⑦で大忍子の死を悼み、⑩で有りし日の有願子を苦ろに
思うのであった。忘年の友の死を詠む時、兩人に「子」の敬称を
付けたのは偶然の一致であろうか。どこかに良寛子という用例は
ないだろうか。こんな事に想いを馳せるのは文学を読む者の楽し
みであり、研究論文の対象にすると無味乾燥化してしまう。

⑱ 病起

一身寥寥耽枕衾

夢魂幾回逐勝游

今朝病起江上立

無限桃花逐水流

○寥寥||寂しく静かで空しいさま。『永』巻四の「寥寥、九夏超。諸
相。兀地無端二十空」の傍点の語に注意。良寛にも「遍界寥寥知
音稀」「寥寥只自知」「寥寥对虚窓」ほか用例多し。

独りの生活は寂しくずつと寢床の中で病臥し　夢の中で何度も楽
しかった遊びや旅の思い出を追いかける　今朝病床から起きて川
べりに立つと　桃花も限り無く流れていく

逐の字の重用は、夢魂と桃花の同質性を暗示する。有願や田面庵
の語は無いが、結句から有願老居士の姿が彷彿と浮んでくる。

注

(1) 台北市世界書局刊『詩人玉屑』四四三頁。

(2) 『空華集』巻十一（『五山文学全集』第二輯一六六五頁）。

(3) しかし、義堂周信のこの詩観は後に修正される。拙著『中世禅林
詩史』二四九頁以下、及び拙論「義堂周信・絶海中津」（『仏教文学
講座』第三巻）二八七頁以下参照。

(4) 良寛は『法華転』及び「勸受食文」の末尾に沙門良寛と自署し、
鈴木文台の「草堂集序」には、草堂集者北越之良寛禅师題号其集也
と記す。

(5) 良寛が生れた山本家の菩提寺円明院は真言宗に属し、良寛の弟の
観山房有澄が第十世住職となる。

(6) 良寛の墓は隆泉寺に在り、良寛遺墨に「西方安楽国　南無弥陀仏
一念又十年　往生何所疑」という偈や「愚かなる身こそなかなか嬉
しけれ　弥陀の誓にあふと思へば」「良寛に辞世あるかと人間はば
南無阿弥陀仏といふと答えよ」という和歌があつて、彼は深い阿弥
陀仏信仰を有していた。良寛の妹みかは出雲崎町羽黒の浄土真宗浄
玄寺に嫁ぎ、『阿弥陀経』借覧の良寛の依頼状が同寺に伝存してい
る。

(7) 大忍は『無礙集』序文に、北越沙門、僊大忍自題無礙庵中と記す。

(8) 国立国会図書館蔵『無礙集』に依る。

(9) 証聴の「良寛禅师奇話」に「愚魯日用無一法与人」とあり、解良
栄重『良寛禅师奇話』に「師更二内外ノ経文ヲ説キ、善ヲ勸ムルニ
モアラズ」とあるのがその一例。

(10) 栗田勇他「わがこころの良寛」（春秋社）八七頁・一五二頁及び
拙論「騰々任運の系譜」（『相愛国文』第七号）参照。

(11) 良寛の⑦「病中」と魯仙の⑧「読良寛良人偈」の関連は、内山知
也「良寛詩の成立」（象山社『良寛研究論集』所収）で論述されて
いる。

(12) 『永』巻一「不得不知は仏の大意　風流深き処却た風流」「永」巻

四『生を究尽し死に参得し 放行把住風流を逞しくす』をあげる迄もなく、風流の意味は世俗的な風雅ではない。

(13) 松沢佐五重「大森子陽とその周辺」(前記象山社本所収) 四八六頁以下に詳しい。

(14) 宮栄二「大而宗龍禪師史料」(前掲象山社本所収)。

(15) 新潟県分水町渡部の東岸寺所蔵の六曲屏風や新津市金津の慈眼山高巖寺所蔵の六曲屏風。

(16) 長谷川洋三『良寛禪師の真相』(名著刊行会) 一一九頁以下。